

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 25 日現在

機関番号：12501

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24730460

研究課題名(和文) 賀川豊彦と同労者の社会事業にみる地域協働モデルの検討

研究課題名(英文) studies on the community cooperations by the context of Toyohiko Kagawa and his co-workers

研究代表者

伊丹 謙太郎 (ITAMI, Kentaro)

千葉大学・医学部附属病院・特任助教

研究者番号：30513098

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、戦前における賀川豊彦と同労者の社会事業実践について、神戸・大阪・東京という3つの同労者集団による活動の地域的偏差を意識しながら、比較研究をおこなった。本所における同労者集団の固有の特徴が後年の賀川豊彦の思想にも大きな影響を与えるに至った点や、戦後の協同組合運動に何が引き継がれ、何が彼らの構想として途絶することになったのかを史資料解釈を通じて明らかにした。

研究成果の概要(英文)：In this research project, based on the comparative method, I figured out the difference between the activities and movements of three groups that is geographically distant each other. these three groups are situated in Kobe, Osaka, and Tokyo. I especially focused on HONJYO co-workers and its activities in Tokyo. The Uniqueness of that group is grounded on the post-earthquake conditions of KANTO DAISHINSAI and the effect of Taisho Democracy(Liberalism) for young generation. Within my opinion that pointed out by this research, HONJYO Group is far different from the original thought of Toyohiko Kagawa and that influenced to the co-operative model of social movement and community development of Kagawa himself later.

研究分野：社会福祉学

キーワード：社会事業史 社会福祉思想 協同組合運動 賀川豊彦

1. 研究開始当初の背景

本研究は、これまでの賀川豊彦研究の中心が賀川本人の作品等に基づく批評的な研究であったのに対し、同労者の立場から賀川グループの社会事業・運動について描き直しを行いたいという意図から開始された。賀川同労者のうち、中核集団は大きく神戸・大阪・東京の都市部三地域に存在しており、このなかでも東京本所の同労者たちは関東大震災直後の救援事業を端緒とするセツルメントを源流とする。

研究開始当初は、2011年の東日本大震災の衝撃が大きく、震災復興というものがかつてどのような形をとって行われてきたのかを確認することが、歴史研究に従事する者にとっての社会的義務であるという意識を強く持った。

こうした経緯もあり、研究開始より、賀川同労者集団三地域の比較研究のなかでもとりわけ東京本所の取組がどのような特質をもつ実践であったのかを中心に討究していくことを眼目とした。

2. 研究の目的

本研究の主要目的は、賀川同労者集団のうち、特に本所基督教産業青年会を端緒とした東京のグループがどのような特徴を持っていたのかを析出することである。

また、それを通じて、現代のコミュニティ問題の解決においてどのような地域協働のあり方が適切であるのかという点で、現代の社会政策にも示唆的な視点を抽出することも大きな目的となっている。

神戸新川は、賀川が活動を開始し、長期に住み込んだ場所である。賀川が目にした港町神戸は、産業化・近代化の負の側面が凝縮した現場であり、この意味で他の地域に先行して諸問題が発生していた。無名の賀川が単独で活動をはじめ同労者たちを集めていったという点では彼にとっても活動の原点として重要な位置にある。

大阪四貫島は神戸の例と近似的なものであるが、その違いは賀川がアメリカで学んだ社会事業運営の手法が先端的な形で採り入れられている点であろう。

上記二地域に対し、本所は賀川自身の思惑を外れるほどの例外的・特異な事業体であった。事業開始に至る経緯が震災であることもそうだが、その後の東京を大きく変えた後藤新平に代表される帝都復興計画を含め、a) 平常時ではなく例外的空間を基盤とした点、b) 大正期の新しいメンタリティを備えた青年層が中心となった都下近隣の社会事業・社会運動との接続など、東京本所で展開した賀川ミッションの活動は極めてユニークな性格をもつものだと思われる。

このようなかたちで、本所の賀川同労者集団の史的展開と事業・運動の現代性を検討すること、特に各地域・時代に立脚した同労者集団の偏差を確認することで、賀川の社会事

業観を逆照射することが本研究の主目的となっている。

3. 研究の方法

本所基督教産業青年会の主事であり、関東消費組合や中ノ郷信用組合創設にも尽力した木立義道等の本所賀川ミッションの同労者たちの実践について東駒形教会所蔵の未公開史料に依拠した実証的研究(データベース構築) 同労者集団関係者を中心に実施したインタビューによるオーラルヒストリー収集、賀川ミッション機関紙等の同労者集団に流通した史資料、賀川本人の著作、二次文献(研究論文・研究書)等の読解を通じ、神戸・大阪・東京の三地区同労者集団の活動内容・範囲・組織変化・人的ネットワークなどについて比較研究を行った。

社会福祉思想・協同組合思想史上における賀川豊彦および同労者集団の位置について、比較の相の下で検討する、いわゆる思想史的史資料読解が研究代表者の主たる方法論であるが、本研究では、社会学や歴史学、政治学の手手法も積極的に採り入れ、学際的なアプローチになるよう心がけた。

また、賀川研究のほか、日本キリスト教宣教史、社会福祉学、社会事業史、協同組合論などの各研究グループとの交流や学会報告等、さらに現代の都市問題・コミュニティ問題に関わる千葉県域を中心とした社会事業やNPO団体との連携により、研究としての洗練と同時に研究の社会的意義をより深められるよう、研究の見直しを行ってきた。後者については、インタビューや参与観察の手法に限定せず、より積極的にアクションリサーチとして研究と社会实践との間での往還を実現させるように努めた。

4. 研究成果

(1) 賀川豊彦同労者集団の研究を主として、関連分野となる協同組合運動やその現代的展開の研究を含め、研究成果としては、雑誌論文6件、学会発表13件、資料集等を含めた図書4件となる。本所基督教産業青年会庶務綴をはじめとした未公開資料についてのデータベース化は未完成の状態であるため、本研究期間を終えてしまっているため、すみやかにこれを完成させ、関連分野研究者の研究推進にも資する形での公開にもっていくことが終了時点における最優先的課題となっている。

研究の過程において、千葉県で現代の生活困窮世帯に対する食料支援を行っているフードバンクちばに関わることになり、シンポジウムの企画や、自治体や社会福祉協議会、地域包括支援センターなど、各事業者による生活困窮世帯に対する支援実態の現状等を含めた事業所アンケートを実施し、賀川同労者たちが取り組んだ戦間期のスラムや貧困問題、セツルメント事業と今日的な諸問題解決に資する社会事業団体の活動のあり方との連続性および差異についても目配りした

研究成果を導くことができた。

先行研究に対しても、当初は史資料文献解釈の限界を意識した補完的研究というのが本研究の位置づけであったが、データベース構築等のプロセスにおいて、主たる参考文献である賀川豊彦全集の編集における諸問題のほか、作品の多くが講演記録の筆記を元に行っているといった関係で、筆記者の誤解に基づく行文も多く見受けられることが確認されるなど、先行研究が依拠する史資料そのものの問題性にまで立ち入って先行研究に対峙する環境を整えられたと考えている。

(2)さて、神戸の場合、賀川が活動を開始したのが日本経済の産業化の真っ只中の港町であったこともあり、他の先進国におけるスラム問題とかなり類比できる特徴が見いだされた。戦後に続く光景をいち早く象徴する農村から吐き出された次三男が産業労働者ではなく、棄民化されてゆくプロセスについて『貧民心理の研究』等、詳細な調査に基づく示唆的な議論が展開されている。賀川と神戸新川同労者との関係は、無名の青年であった賀川が住み込み彼の活動に共感した周囲の若者を巻き込むという形で持続的な展開を見た点に特徴がある。

賀川自身のアメリカ留学もこうした神戸に典型される近代化の負の側面に対してどのような取組が可能であるのか、その解を求めての海外情勢の視察がひとつの目的であった。賀川研究において常識的に取り扱われるのは、渡米留学を境にして賀川が労働運動を<発見>し、一人ひとりの貧民に慈善的態度で接する救貧から、貧困そのものの原因を個ではなく社会に帰することで、貧困に陥ることのない防貧型の社会環境の形成へと変化したというものである。本研究では、この主流の考えに対しては否定的であり、史資料に基づき、留学前後において賀川本人は決定的な思想的転回 *kehre* を経験しておらず、上述の通説は、小説『死線を越えて』における脚色に依拠したものに過ぎないことを指摘するに至った。同時に、帰国後の賀川が関西労働運動や普選運動においてリーダー的役割を果たすにあたっては、むしろ賀川留学時に同労者集団が友愛会等と（他律的ではあるが）接触を持ったことが重要であり、同労者たちが帰国後の賀川の活動を準備した点こそ重視すべきであるというのが本研究を通じて確認された成果のひとつである。

(3)前節の記載にあるように、賀川の思想的転回を本人の渡米体験に見るような枠組みへの批判とともに、本研究では各時点での賀川による活動方針や思想の変化がある場合には、むしろ同労者実践の影響下においてのものであるという視座を確保することとなった。ここで賀川が多様な社会事業・社会運動を経た帰結として「協同組合運動」に対して最も信頼を寄せるに至る経緯は同様に、

同労者実践の反映であり、とりわけ本所同労者たちの実践が極めて大きな影響を与えたものであること、これが賀川研究への貢献として本研究のオリジナリティの核心となっている。賀川は初期著作群よりギルド社会主義に関心を寄せており、この点では協同組合主義の一步手前までは本人の思索に拠るところが大きい。また、多元主義・団体主義型の社会構想については、多元的国家思想をわが国に最初に移入した同志社大学の中島重（吉野作造門下、賀川とともに基督者学生運動を主導した）との共振関係も確認された。しかしながら、戦後特に強くなる賀川の協同組合主義に至る中、背後にあったのは、海外思想の移入ではなく、賀川本人は企図せず、同労者自身の模索の中で生み出された諸実践の中で獲得した手応えであったと考えられる。

同労者たちとの密接な関係とともに賀川本人が直接的に指導にあたった竹内勝たち神戸新川ミッション、賀川自身が社会教育や社会改造という同時代思潮の中で選択した方針を忠実に実践し、さらに洗練された形を目指した吉田源治郎の大阪四貫島ミッションに比して、賀川本人の直接指導も薄く、運営において賀川の意図に反して拡大路線を採った木立義道たち大正青年層の手探りの末に見出されたものである点が非常に重要であると思われる。賀川と同労者との関係のあり方が地域によって多様性をもつとともに、賀川自身が同労者からの影響を多分に受けた形で思想の転回を遂げたことは、賀川豊彦像の読み直しとして、通常の特出したリーダーとして賀川を描く先行研究とは一線を画した視座を獲得しえたと考えられる。

(4)本研究は賀川同労者の実践をテーマに掲げるとともに、現代における地域協働モデルを検討することも大きな目的としている。この点では、本所の実践が、テントから活動をはじめた基督教産業青年会が総合的セトルメントであった段階を経て、単機能の分野別組織（江東消費組合、中ノ郷賃庫信用組合など）が各時期にスピンアウトしつつも緊密なネットワークを通じて包括的にコミュニティを支える事業示唆を与えてくれる。

こうした活動の拡大と分岐を経てもコミュニティ基盤的な協働を維持する上で、人的ネットワークの特異な編成様式の影響が強かった。建物が一角に並ぶという物理的構成もあるが、本所同労者たちは、フルタイムでの就労として、あるいは専門職として自律的な事業体を形成するのではなく、<兼職>によるアマチュアリズムを維持しつつきてきた。

各地域構成員のエンゲージメントを高めることをひとつの目的とした場合、支配的な地域リーダーや専門性による分業を回避するこの方式が事業拡大に資するものであったことは、現代の協同組合運動や地域協働において見過ごされがちであるが、社会事業の

展開において極めて重要な要素であると思われる。この視点を具体的事例による歴史研究において確保できたことは、研究の社会還元という意味でも多産な成果であったと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

伊丹謙太郎、「日本の協同組合陣営の市場シェアと雇用力」、『協同組合研究誌にし』、査読無、第651号、2015、pp.13-21

伊丹謙太郎、「賀川豊彦同労者事業・運動の広がり多様性」、『客員研究員報告書(2)』、査読無、2015、全労済協会、pp.63-87

伊丹謙太郎、「『本所基督教産業青年会庶務綴り』目録(2)・解題」、『賀川豊彦研究』、査読無、第61巻、2014、pp.128-137

伊丹謙太郎、「『本所基督教産業青年会庶務綴り』目録(1)・解題」、『賀川豊彦研究』、査読無、第60巻、2013、pp.67-73

伊丹謙太郎、「書評：浜田直也『賀川豊彦と孫文』」、『賀川豊彦学会論叢』、査読有、第20号、2012、pp.93-97

伊丹謙太郎、「賀川豊彦の協働者にみる協同組合理念の継承と展開」、『協同組合奨励研究報告』、査読無、第38輯、2012、pp.163-200

[学会発表](計 13件)

伊丹謙太郎、「大学における協同組合教育と地域協働カリキュラムの構築」、『日本協同組合学会秋季大会』、2015/10/3、岐阜大学(岐阜県・岐阜市)

伊丹謙太郎、「賀川同労者としての浜松聖隷者同人たち」、『賀川豊彦学会研究大会』、2015/7/31、明治学院大学(東京都・港区)

伊丹謙太郎、「同労者集団としての聖隷社」、『賀川豊彦松沢フォーラム第2回例会』、2015/5/23、賀川豊彦記念松沢資料館(東京都・世田谷区)

伊丹謙太郎、「浜松聖隷社同人と賀川豊彦 - 医と農への分岐を中心に」、『社会事業史学会春季大会』、2015/5/9、愛知県立大学(愛知県・長久手市)

伊丹謙太郎、「就労困難とワーカーズ、4つの取組へのコメント」、『協同労働の協同組合ネットワークちば交流セミナー』、2015/2/21、千葉大学(千葉県・千葉市)

伊丹謙太郎、「賀川豊彦同労者における事業観・運動観 - 浜松同労者と聖隷事業団の場合」、『日本協同組合学会秋季大会』、2014/10/25、愛媛大学(愛媛県・松山市)

伊丹謙太郎、「千葉大学における協同組合教育と大学生協の役割」、『ILO協同組合リーダー国際視察団研修会議』、2014/9/3、千葉大学(千葉県・千葉市)

伊丹謙太郎、「賀川豊彦から考える<新し

い公共>の実践的イメージ」、『協同集会 in 千葉』、2014、2014/4/20、千葉大学(千葉県・千葉市)

伊丹謙太郎、「『実践の公共哲学』の問題圏とその射程」、『公共福祉研究会第26回研究例会』、2013/5/11、CIC東京(東京都・港区)

伊丹謙太郎、「賀川豊彦と同労者たちの実践 - その現代性と可能性」、『鳴門市賀川記念館公開講演会』、2013/3/9、鳴門地域地場産業振興センター(徳島県・鳴門市)

伊丹謙太郎、「賀川豊彦の忘却から共助の復権へ」、『公共福祉研究会第22回研究例会』、2013/1/12、CIC東京(東京都・港区)

伊丹謙太郎、「賀川豊彦におけるコミュニティの検討」、『日本協同組合学会秋季大会』、2012/9/30、福井県立大学(福井県・吉田郡)

伊丹謙太郎、「賀川豊彦と同労者の実践における公共哲学的モメントの検討」、『賀川豊彦学会』、2012/7/14、明治学院大学(東京都・港区)

[図書](計 4件)

伴武澄・伊丹謙太郎(国際平和協会)、『賀川豊彦セレクション X 第2期 10巻 (CD-ROM)』、2014

伊丹謙太郎、「情報社会における協同組合運動」、『中川雄一郎・杉本貴志編『協同組合 未来への選択』』、日本経済評論社、2014、第7章、pp.189-222

伴武澄・伊丹謙太郎(国際平和協会)、『賀川豊彦セレクション X 第1期 10巻 (CD-ROM)』、2014

伊丹謙太郎、「賀川豊彦」、『小林正弥・菊池理夫編『コミュニタリアニズムのフロンティア』』、勁草書房、2012、第12章、pp.245-262

[産業財産権]

出願状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等
<http://tamiken.arrow.jp/kagawa/>

6．研究組織

(1)研究代表者

伊丹 謙太郎 (ITAMI, Kentaro)
千葉大学・医学部附属病院・特任助教
研究者番号：30513098

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし